耽奇漫録

山崎美成集中

特別
45
1422
2

15
14.2
2

昭和二七年三月十七日 購求

八束文庫

耽奇漫録　中之巻

晉其角十年自画賛　甲申十二月十日　梅図

筑後柳川産雑子車　五種　蝦蟇　松蘿彼

京都両替庁酒具　海棠菴

古銅作　松蘿彼

鰐車　写山樓

鶉車　甲申十二月八日　松蘿彼

米饅頭の袋　同

志乍軒肖像　梅図

乙酉正月三日　不忍庫

帝国図書館蔵

古尾　六枚　某矣

寛延年間一牧揭大小　海棠庵

延寶中處子肖像　一卷　著作堂

獅々頭　〃

古尾　四枚　乙酉二月朔日　某矣

古代一牧繪　松蘿飯

雙六　廿八枚　〃

遠方玩具　ふゝ枚　南蘭庵

元吉尓繪図　乙酉三月十三日　護国

娼妓畫牒　一冊　〃

楊貴妃像　文寶堂

遊女大門出之切子　乙酉四月十三日　好問堂

大門出木札　南無佛菴

高尾乃紙印　著作堂

大和五条赤根屋看板　海棠菴

以上

昔貫角十年之夜匡賛　笠五箱奥書あり

雉子車

筑後柳川産子とも七月七日遊ひあ

蝦蟇五種

明物竹の茎床

又

三足

南京磁水滴

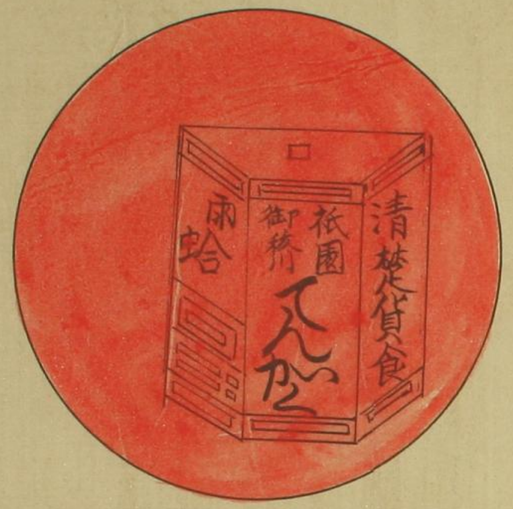
三足

明物蝋石の筆洗

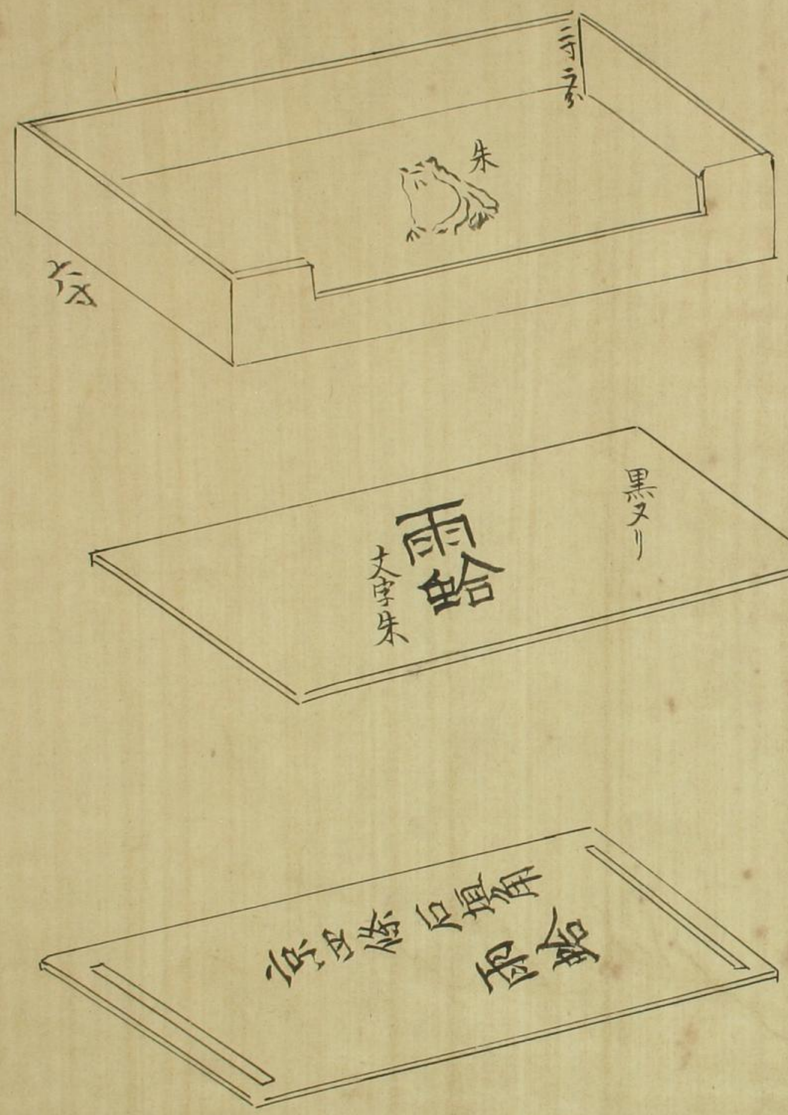
自然石

京四條雨蛤店酒具

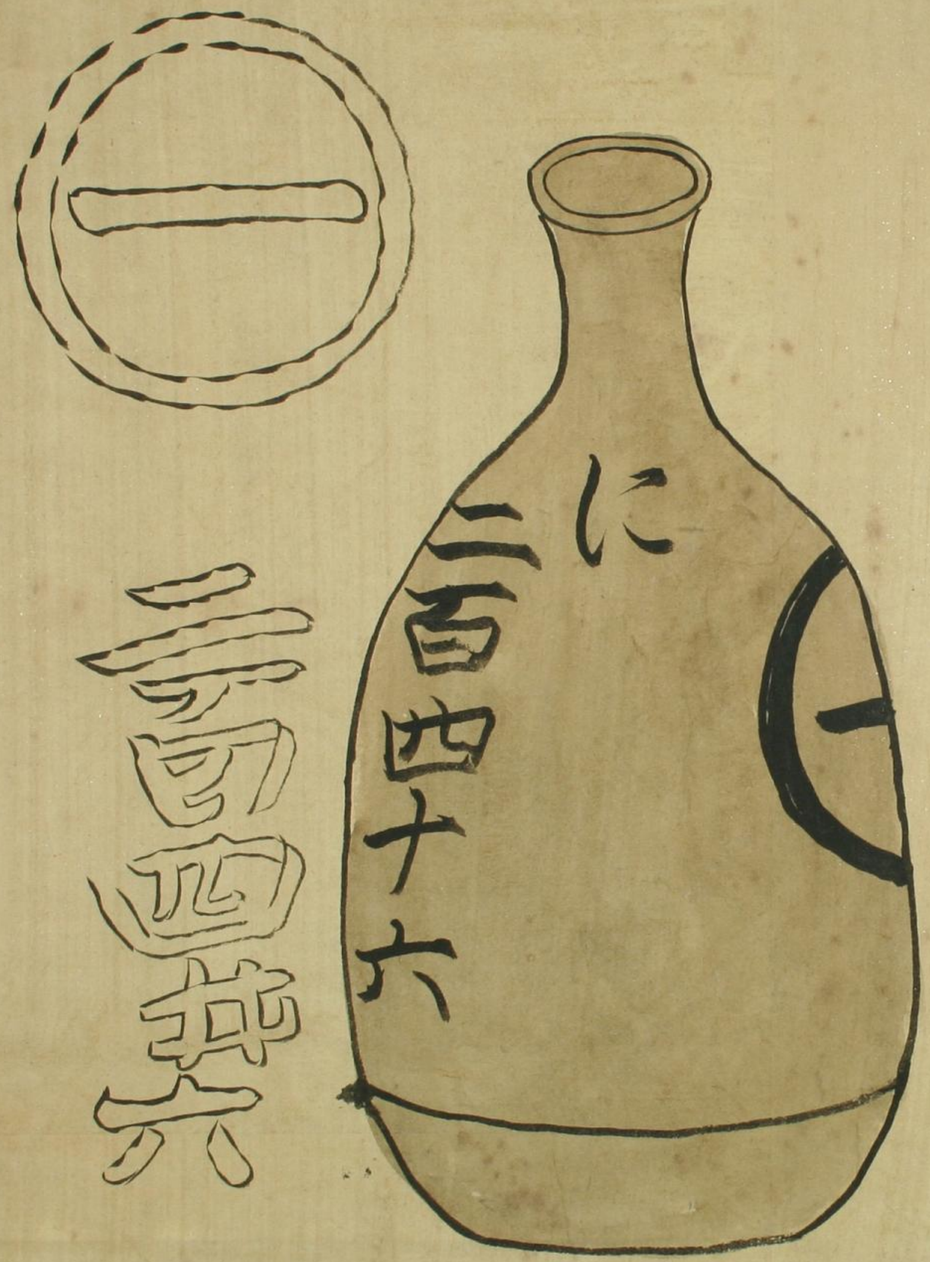
面

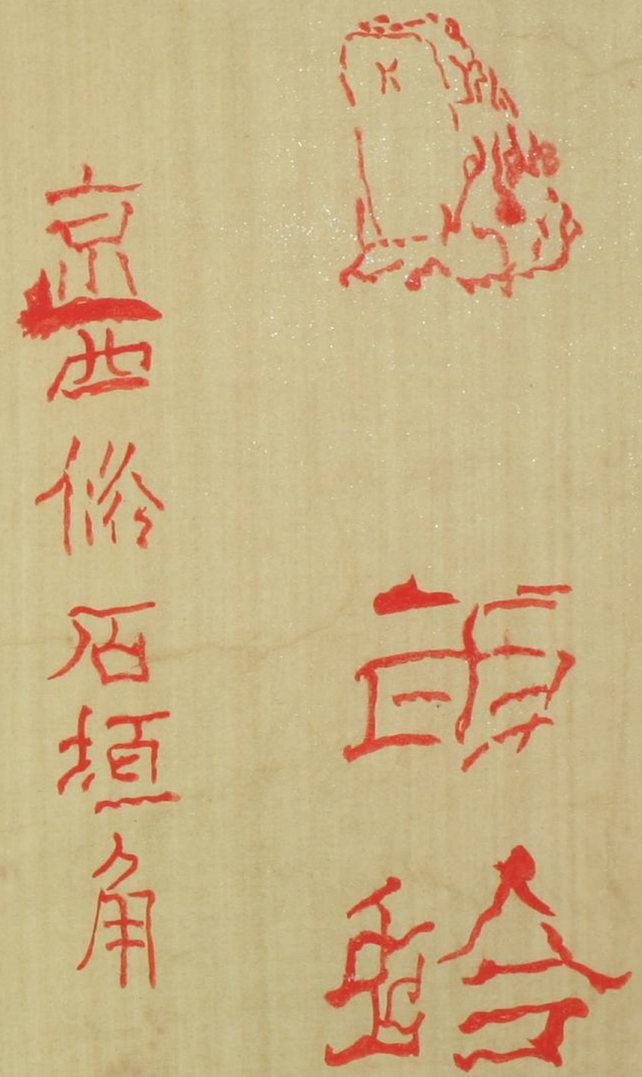


背


三寸六分
朱
六寸
同
田樂箱
黒ヌリ
雨蛤
大字朱
銀墨
無風日蒸角硯

雨蛤
雨
藤巻
厚七分


に
二百四十六
三百四十六


京西俗語
西俗語
西俗語

いつれところありけん京都にハ俗石垣角ハ薩摩を法て
酒と田ふとゝふをあきものふ茶あり荷ひ茶屋ハ
ハ雨ハ法といふところあをかく雨ふるとんの名つけ
たるもちろんところハ薩摩ハこのもの土瓶造を屋の称る
く高ひ日てハ呉ゆくとて今ハ雨蛙の名をあらくめ
さるハそのもゝめ殺ふれさるハ意あるなゝ
回ハ京都の汚辱ハ通ひとゝりハ江戸ハ忌と異なる
なるんなるとハ附ハ

右羽章

右

文曰 山脊國印

古洞章

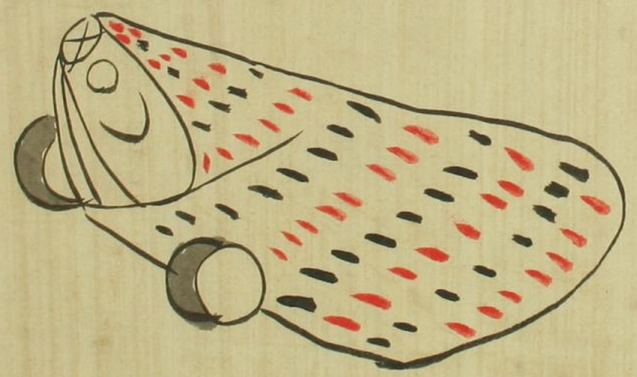
文曰 延暦寺印

右二顆 字山横蔵

大隅産
國分宮内八幡祭礼の節これを賣

日向産鶉車

高岡法華寺の祭る響



此鶉車八古く百済人帰化して百歳まで生
初めより其の形を摹造して推葦毛敷と名れ八命
長々とて薩州侯の宮中へも年々奉るとそ

米饅頭の袋

名物

米まんちう

金龍山

浅草寺仁王前

これハ古代屏風より出たり畫風おのづ
から〜やまとたましひをあらはす
兼成誌

志道軒肖像

きんとんと
大坂冥の京
うちとめる美代の
石志道軒娜　四山全　印

白虎樓古尾

白虎樓

琴樂院古瓦
春興殿古瓦

神祇官古瓦

鴻臚館古瓦

寛延四辛未

寛延年間一枚摺大小

鳥居清信筆

吉上村

式部省古瓦

延寶中戯子肖像臨本一

中村ろんこ帝

玉河主さん

按するに此肖像は寛文延宝間のものなるべし　こゝに図
なる玉河主膳は二代目やあらん役者大全に市村竹之
丞とお座なりとゝふ元祖玉河主膳は後
こは寛文十二年春二月江戸本坂下後楽園に
図したるものなり　尺えりこゝ
柯るれ河人はあるべきなれども巳に五三の
考へ
又花井七三郎は元禄中に至て立役の立ものなりきこれ
色子の称なれは延宝中のことゝ元禄に至りて役者
なるべし　法花玉河千之丞豊門左衛門ふるべし然れとも

同名のもの有りとうかゝふ〜もあれハ元祖うその才子狂言
杜市九郎ハ垣下住狂言草ゟ杜本を水といふものゝ人へて級
（粕）々くの如くありこゝゟ図〜たるものゝ級ハ似ゝ仮〜
こまハ瓜の内ゟ粕なれハ主水ゝ才子ゟ狂
この他代色子ハ垣下住狂言草ゟ姿記浮林ゟ載するゟのゝ
もの一人もあ〜姿記浮林ハ元禄十三年の印本まて初ゟ
水木辰之助ゟ此ゟ七変化の図あり後ゟ当時の色子を集録
せ〜ものゝありこの者中ハ戯子ゟ役三本中の戯子ゟ同
じゝぬハ寛文の頃延宝中のものとするのゝゟおかこれハと
考ふハ完ゝゟ証もなゝ然れとゟおのれ迂ゝゟハこゝらの
穿鑿ゟ有のゝ多くゝ此のゝんをとあまれとハくりゟ〜
てゝやゝぬゟ不協君の切鑿を希ふのみ

右著作堂蔵

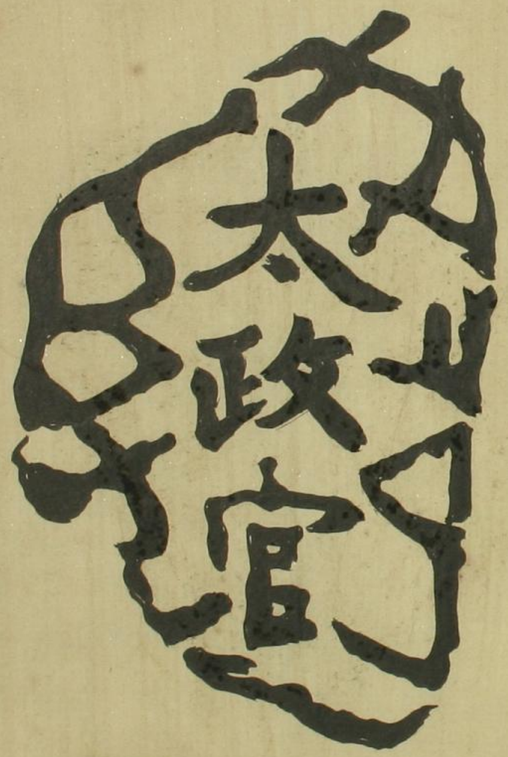
梅園翁

獅子頭　杉木製

法隆寺

天王寺古瓦

大政官古瓦



民部省古尺

民部省

右四種京庫家藏

右四種系庚家藏

雙六廿八種

浄土雙六　巴種

古重南無阿弥陀佛　古板目

阿部侯蔵板　一二三　西村屋板

道中双六　延宝　天和の比北越行

恵方参詣双六　豆塚お伽土産絵あり

おでこ双六　芸者揃摸刻

藤川天満大てけ双六　鎌形屋板

伊勢八津でもり双六

鳴もの尽くし双六　大坂板

岩戸双六
市お額尺世双六
扇祢双六
涼み手綱双六
かるたの早い双六
ろくしやも双六
甘露壷双六
道中名所双六
同
同

鶴金板
丸小板
鏡形屏板
鶴屏板
西宮板
鏡形屏板

京大坂形図双六
世事姫双六
顔見世双六
板分道中双六
大内裏絵双六
東歌伊勢図双六
江戸世事双六
同

右 杉蘿飯蔵

四宋絵屏板
岩戸屏板
沢村板
和泉屏板
山田屏板

京都のあるまき玩具

おきあがりこぼし

九なんまきたりおきなな
又ふあ者まておきんめ
為とふてにぼまてをそ紀
とう小法師と同しいてなる

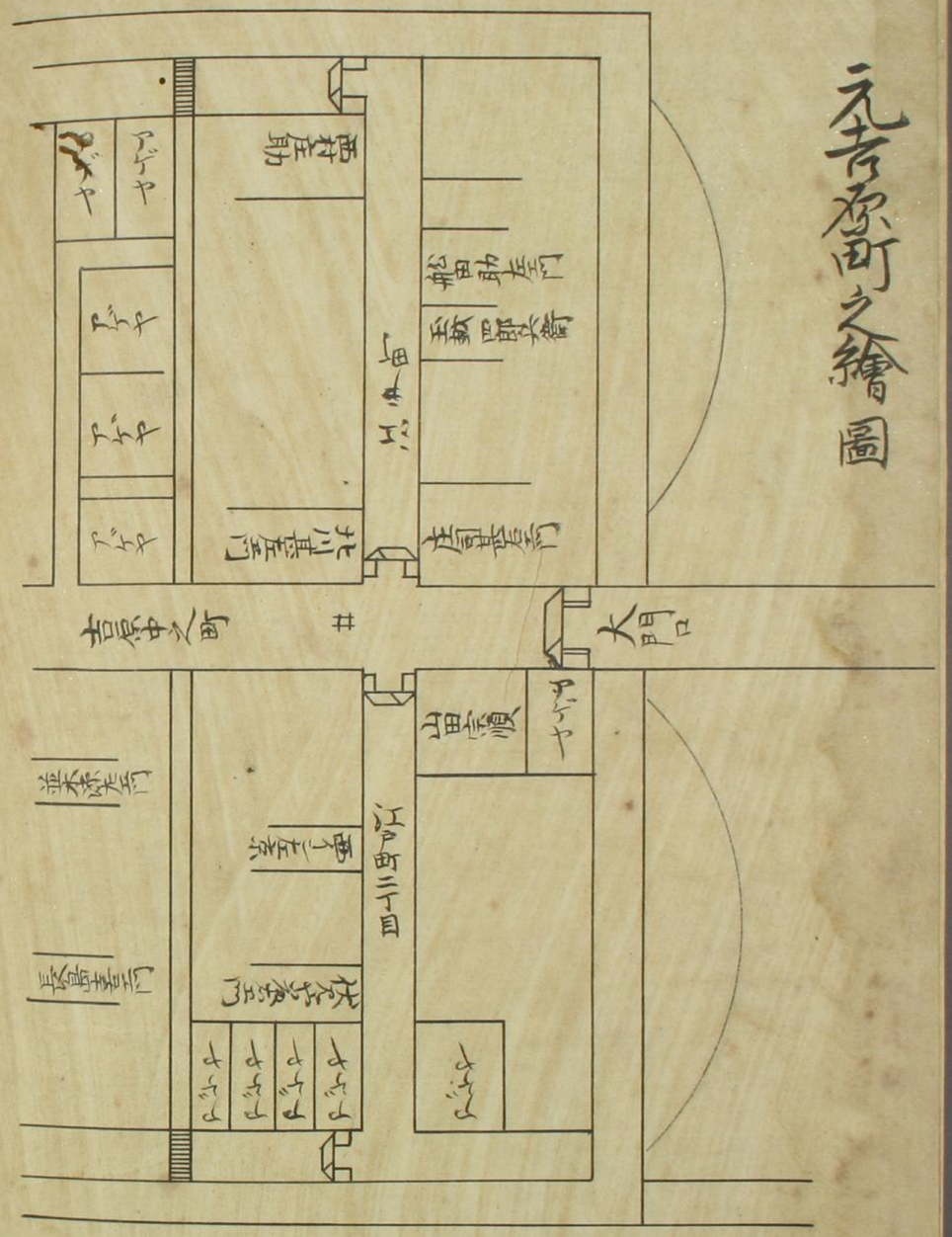
慶長十七子年十二月中社司基尚
元の名内匠
と云へる君初めて江戸に移り
肥州小田原の産
彩る掛茶屋町を一廓に建ておまはせ
ねまゝ中けるを為つゝ泊もゝやはゝと称し
免されるも元和三巳年葺屋町に二所四方に
堀所を移り居る同四丁年十月京毛建物て
みな家業を仕免まゝとゝく繁昌つゝれハ
いとゝ京と地名を芳名

生成まで面々和を列挙して地形つなぎ有る
芳原と云へる後者と云ふ文字は書 瑞雲と
者を以て書始者るゆえ矢て面
元禄者二年今地へ移地と作数年のうちを流て張り筑ハ
同三年三月この新よりこの地へ引移る義
江戸町と云へる者元禄寺町 すまひ者る
地面あまり引移まるゆえ四大江戸
出生致者文ゆ面る所に繁昌の地を
祝して名つくとなん

同じく三月九日の夜より出火 多種焼
京町者翌朝より伺ひ者ゆまて今人者
京都より来引移居 此所ゆりて京町
と称 まつ件者新
又ゆ三月ゆ元和六年より地面 者

冨沢町

元吉原町之繪圖



同七年二月造り弥生る所なれば京都
ゝ称これ大江戸也　江戸繁栄を考へ来る
所なる故あれこれ年名おもて所
並樹等あれよ里俗より新町と称いひなら
ハし者
角町は寛文二年二月京橋角町より伝ひ
ける故也　京橋より移来る名称なれ者京
所へ引移りしあり則角町と名づくよりの

永通丸
江戸所三月三丁目より境より角町の角東
京所二丁め三丁めの境中通りまこと不孔井あり
大サ六尺四方屋板そ補理四寸角なるそ
縁とそその井戸より小桶なる板丸太なるそ柄
とつる柄板木なるつけ角まこと井戸八五門
上の名を引きて地底まこと二尺余石なるて桶底
ふ也長谷川町より江戸町の辻へ理まこと迄より

角町京町より辻へ入る西角の家に
入る通りとなん
川岸八幡宮の東方濱町通り堀を
用ひ西の方大門はの角京八桟木橋よ
隔て汁田屋を右京町用の内堀際乃
石垣門岸とハ山ひ[illegible]なり

娼妓畫帖（セイエホン）　初丁か跋

蓍雲

言尾

和書
鳥居庄兵衛
清信畫

元禄十三歳辰閏春月
和泉町板本屋
七郎兵衛板

世ろろ名きゝふあろびどもゝ我何つめゝ冊子とあせきゝ
其中まもけ二君八人乃知るとこ湯ふまゝ

揚屋請状

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

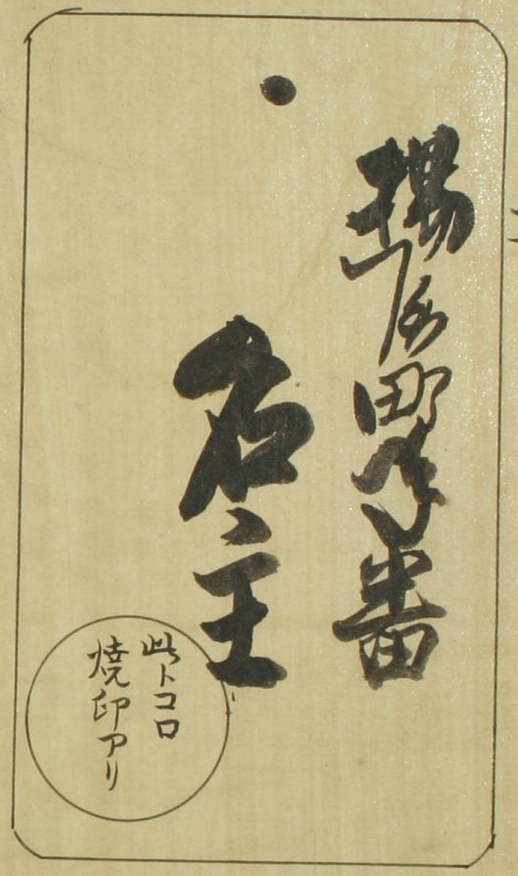
[illegible]

昔より揚屋あるところ娼家へ太夫等
この里よりまゐる時の心揚（キワテ）とあるむ
四郎左衛門とあるハこの浦なるべて清十郎
八尾張屋といひ揚屋あるも

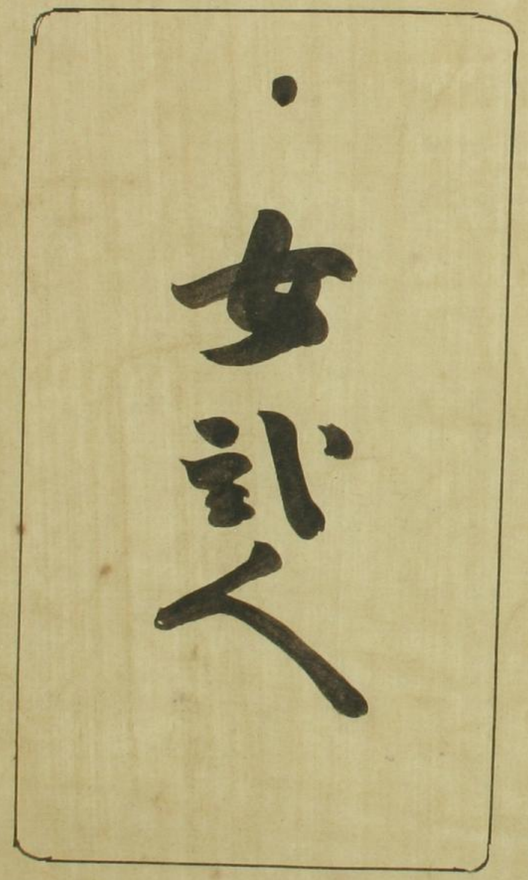
大サ如図

木札ノ厚サ

二



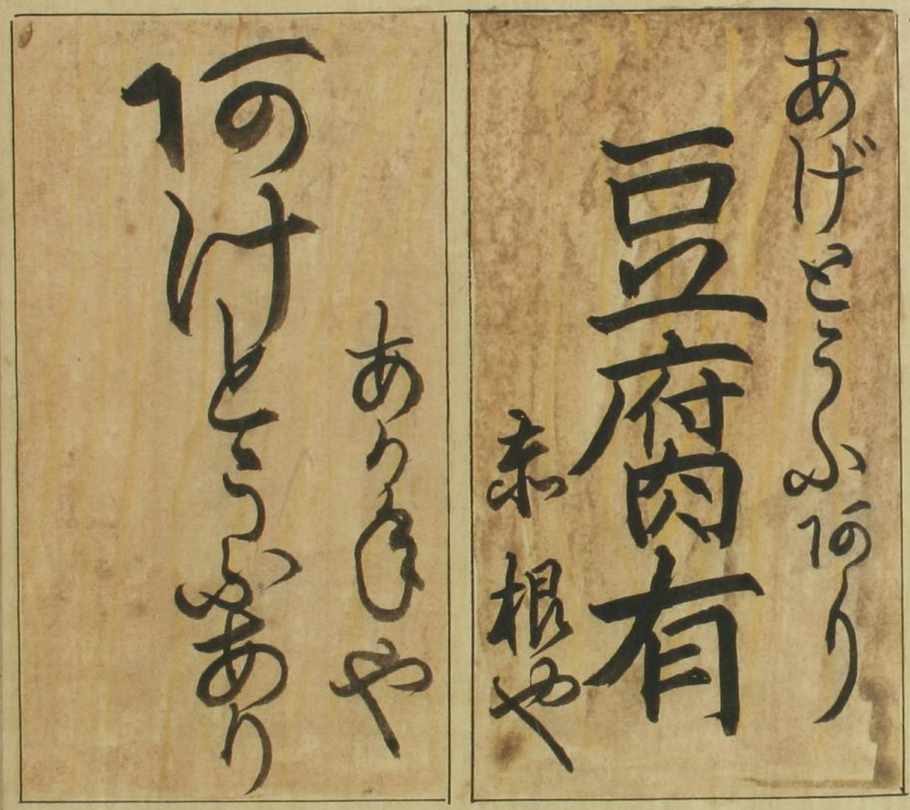
焼印



すべて郭中乃游男つかへもる時此船引かくして
出ること難のあへ〜
真ゑ如婦人ハ皆赤れの門籍ゆ

三浦高尾緘印

大和五条赤根屋看板 揃本 竪一尺五寸横八寸斗り



右の招牌ハ赤招屋の旧物ニて今も猶五条にあるそのゆゑあり文元弘八年赤招屋宗七ことの屋ニ拐と情死者ある時の始末を公より聞えあげたる書と死亡の文と二通とのつゞきよりしるす

右海棠庵